

(新刊紹介)

「青森県租税誌前編」

松本 侃

今日、地方経済史の研究に於て特に必要とされる事は、日本の社会全体にとって最も重点的な向題となっているものを、各地域において詳細に検

証してゐる行き方である。所謂比較経済史の研究は、第一には、その地域の先人達をしろ名もなき大家の生活をうかがうための、第二には、日本社会経済史の全体的理解を進めるための研究となるところに意義がある。つまり、我々は各地域ごとの歴史の究明こそが日本の史学を充実させる力を持つと確信して、その研究に当りたい。その意味に於て、明治十五年に刊行された「大日本租税志」が日本史の研究者、特に社会経済史の研究者に

とつて必読の書である以上に、「青森県租税誌前編」は地方経済史の研究を志す者にとつて必読の書となるであらう。

本書の成つた明治二十七年八月以後も、幾多の郷土史の刊行をみているが、こと藩政時代の経済史に關する限り、本書は依然最高の古典たるの地位を失つていない。それほど価値のある史料でありながら、出版されずにいるうちに、その原本は不幸戦災のため焼失するに至つた。しかし、幸いにして東大の土屋喬雄教授の手によりて戦前にその写本がとられていたので、青森県文化財保護協会は東大所蔵本を底本として復刻刊行した。すなわち、「みちのく双書」第十一集（昭和三十六年十月十五日発行）及び第十二集（昭和三十七年四月一日発行）がそれである。まさに、我々地方経済史の研究者にとつて待望のことであつた。

そも／＼、本書の編纂は、明治十七年本県初代收税長として赴任した宮村清愼が、「租税のこと」は経國の大事であり、人民の幸不幸のかかわると

ころであるから、苛政に陥るのを避けるためには、まずその地方古来の税制を研究して、民情に適合した政策をとるべきである」との信念に基づき、旧弘前藩土蔵西首弥にその編纂を命じたのに始まる。葛西は江戸の昌平黌に學んだ儒者であるが、帰藩後弘前大掌校を組織して育英の事にあたり、晩年は青森に住んで詩文を教えた。本書の他にも、周知の如く「青森市沿革史」「青森世誌」などの名著があり、大正六年六月八十四才で歿した優れた研究者である。この人がなければ、「青森県租税誌」編纂の大事業も遂に完成出来なかつたのであつたらうか。

葛西は、広く県内の各地を歴訪して多数の史料を集め、明治二十三年六月稿を起し、同二十六年十月脱稿、二十七年八月刊行したのであるが、「貞享年中御条目」をはじめとして奥に百十八の史料を収録しており、十五巻から成つてゐる。この間、歳月を経ること満十年、收税長の代ること三人であり、葛西自身のなみ／＼ならぬ努力もさる

ことながら、県当局のこの事業に示した熱意も相当なものであつたらしく、刊行当時の知事佐和正や收税長竹村欽次郎の序文にも、本書の編集を以て「大田屯租税志」の足りないところを補うことを目的の一つに掲げていることでもうかがわれる。

その内容は、永禄年間から明治廃藩置県に至るまでの凡そ四百余年間、津輕南部兩地方の財政、經濟、災害などおよそ税制に關係のある、出来る限りの旧記を收録している。それは、單なる史料の收録ではなく、本県藩政時代の租税制度の大綱とその変遷をとらえうるように配列されたもので、津輕、黒石、南部、八戸、七戸、斗南の各藩を比較考察し、適切な解説を加えている。津輕地方に關して詳細であり、南部地方に關して簡略な点については、維新の際盛岡關係の書類が兵留と共に没收され、旧記が疎漏なためであると述べられており、また史料提供の協力者としては、特に三戸の諏訪内源次、尾形及四郎、七戸の工藤轍郎、八戸の浅山正美、佐藤勝登、鈴木浪江、田名部の菊地彌左衛門、弘前の佐藤要吉、一戸谷弥、笹森

儀助の名を掲げている。

本書の構成は、田制前後篇四卷へ専ら田租に關するもの、雑税大卷（戸口税から諸賦上に至る田租を除いた外の一切の諸税に關するもの）、雑篇四卷へ諸普請から凶作災害に至る租税そのものではないが、租税に直接影響を与えるもの（補遺一巻の全十五卷より成る。「承次のく双書」第十一集は、上巻として田制前後篇の四巻を収めたもので、第十一卷の県内諸藩の石高沿革と郡、郷、組、町、村の沿革、第十二卷及び第十三卷の新田開發、田尺制など土地制度、村位田位などの租税制度、田畑收納の沿革、第十四卷の知行田、社寺寄附田、宅地や租税の細期などに關する史料を收録している。同第十二集は、中巻として雑税六巻を収めたもので、第五卷の山林原野總反別、山林区分、山方役人、山林税、柚取役特に漆木役、株場、炭釜税、釜山、温泉、第六卷の戸口總數、牛馬總數と諸役、船舶、水主役、第七卷の酒役をはじめ諸營業、諸雇人の役、漁獵税、塩釜、請負のこと、第八卷の關所及び湊の所在と諸役、特に移出米、

村木、奥類海草の移出、燈明台のこと、家九巻の宿駅、伝馬制度、京大坂江戸廻船、第十巻の諸普請とその他の工夫割出方法、大工左官工料などに關する史料を收録している。ちなみに、雜篇四巻と補遺一巻は下巻として近く刊行される予定である。

地方史特に經濟史の研究は落穂ひろいといわれ、散在する史料を丹念に集めることが第一の仕事であり、それらの史料を正確に分析することが第二の仕事であり、その分析を通して色々な向題点を提起してゆくのが第三の仕事である。それらの困難に直面している我々にとって、本書の存在は誠に有難いものであり、本書の中には未開拓の數多くの好テーマが包蔵されているのである。本県社會經濟史の研究者は、すべからず本書を熟読玩味せられ、協力して向題の追求にあたられるよう期待してやまない。私もまた、他の機会に探索の結果を發表させて頂くのもりである。